

彼岸花

作詩 鶴崎ひろし

作曲 江草 啓介

香の煙が ゆらりと揺れて
不幸をわびる 娘がひとり
今年の暮れには 結婚します
父の墓前に 手を合わす
年が明けたら 二人でここへ来るからと
誓う小径に 彼岸花

蝉のしぐれも 何処かへ消えて
静寂の中に 返らぬ過去が
背中で眠る 幼い顔の
汗を拭った 堅い手よ
クヌギ林の 木陰の中を抜けて来る
頬に優しい 秋の風

百合のひと枝 注いだ水に
想い出だけが 涙を誘う
理由など忘れた あの日の喧嘩
父にとりなす 母の声
家を離れた 私のことを最後まで
呼んでいたのか 彼岸花